

## 第35回 田んぼってどんなところ？

昨今の食をめぐる問題は、「食べもの」と「食べものが生み出される大地」の距離が遠くなってきたことに起因するところが多い。口と土との距離といってもよい。

遠くなると見えなくなる。見えないと想像もできない。そうすると、無いかのようになり、忘失する。

それならどうすればいいのか？ 距へたたりをちぢめ一体化する。どうしよう？ 田んぼに突っ込む。単純なことだ。

六月のはじめ、給食で出している無農薬玄米を届けてくださった井田さんの田んぼを年長児と訪れた。魚はどこから来るかという問いがベースになるお魚探検隊と同様。お米はどこから来るか。日々給食で口にしている、当番になったら研いだり炊いたりしているお米はどんなところから来るか。

無農薬栽培というのは大変だというだけでなく、ある一線を画することになるというとは井田さんの話を聞いて、知った。そして、無農薬を実現させるために、井田さんはアイガモ農法をされている。そこで、「アイガモ進水式」という提案を頂き、訪ねた。

重要なのは、触覚だ。触れるには、そこまで行かなければならない。身を置いて、はじめて、触れられる。触れると、ひとつになる。

視覚、聴覚に局限されながら野放図に広がるネット社会で抜け落ちるのが、こわい。

田んぼと一体化する。食べものになるものを産み出す大地、生命を産み出す源、この《産み出すもの》と一体化する。

そこから、言葉も生まれてくるのではないか。大人が与えた言葉を覚える苦闘のなかに、子どもたちはいる。そんなときあいの言葉ではな、生まれたての言葉に、子どもたちだからこそ、その誕生の現場に、立ち会えるのではないかと期待してしまう。

視覚的言語としての田んぼ（田んぼの姿の描写や形容）は、いろいろでも語られていて、新しく語らなっていくのは、あつちのまなこだ。でも、触覚的言語としての田んぼは、まだまだ開発されてないだろう。



その日は雨になった。イヤだなあと考えた。近くの施設でお話を聞きつつ雨宿りして、雨がやむまで田んぼに行くのをちょっと待ってみた。しかし上る様子もないので田んぼに向かった。雨でよかった。

雨が、遊びの気分をいっそう高めたからである。「あめ」は雨だけと天でもある。「天地」と書いて「あめつち」と読む。天からもたらされるものが雨であり、雨によって天と地が結ばれる。雨の中で、つまり天地が一体化した中で、子どもたちが戯れる。

遊びに無我夢中になることを「遊戯三昧（ゆげさんまい）」と言う。それは忘我脱魂であり、なりきることで抜けきることである。われわれの体のもとである大地と一体になることを狙って来たのだが、それ以上だった。天と地が一体になったところに子どもも我を忘れて一体になっている。天地とひとつになったところからまたさらされる子どもたちの動きは舞踏のようになっていく。ほくは見えている光景にうつとりしていた。同じ世界に身を置いていることが底なく快樂だった。

田植えしたての大切な田んぼと、アイガモちゃんたちの進水という貴重な機会を、惜しみなく園児に与えてくださった井田御夫妻への、感謝を以て擲筆する。

まるで舞っているようなこの写真。歩いているだけなのだが、泥に足を取られて、普通の歩行ができなくなる。すると、歩行は舞踏になる。田んぼが、そこにいる人を踊らせる。あめつちのおどり。古来、田んぼと神事は結びつき、神事と踊りは結びつく。踊り三昧でトランス状態に入るとき神を見るからである。そういう結びつきの必然性がわかるような、園児たちの田んぼ舞踏



井田夫妻が読んでくれたのは、  
手作りアイガモ紙芝居。



子どもたちと一緒にアイガモをのぞきこむ姿はやさしげなお百姓です。



触れ方を教えてもらい、包むようにかかえて田んぼに放します



☞はじめはおそろ  
おそろ田んぼに足  
を入れ、ゆっくり足  
を泥から引き抜い  
ていたのが・・・

何分かしたら ☞  
もうこのとおり、嬉  
嬉として走ったり  
転んだり



「プリンみたいだけど泥に沈む」「ぬるぬる足にくっついてくる」だそうです。



帰ってから描かれた絵。よく描けてるのは  
関わりの強さの証のよう

